広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古浦先生の思い出
Author(s)	峯, 正志
Citation	プロピレア , 23 : 4 - 6
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044333
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

古浦先生の思い出

峯　正志

金沢大学国際機構留学生センター教授

古浦敏生先生がお亡くなりになった。

私が広島大学文学部言語学科に入学した昭和 54 年の春、吉川守教授と古浦敏生助教授が私たちを迎えてくださった（前田徹先生が助手としていらっしゃったが、翌年早稲田大学に移られた）。吉川先生も既に鬼籍に入られ、時の流れを実感する。両先生とも優しくかつ厳しい先生ではあったが、イメージとしては、吉川先生は「厳しさ」、古浦先生は「優しさ」をより感じさせる印象があった。学生への教育において、両先生のこのバランスが絶妙であったと感じるのは私だけであろうか？

一年次は教養の授業のみで専門の授業はなかったので、言語学の先生方の授業を受けるのは二年次以降である。いろいろな外国語を勉強したいというだけの理由で言語学を選んだ私だったが、言語学教室の先生方が皆実際に多言語を習得して授業まで行っていることは、驚きと言うより衝撃だった。両先生ともご自分の専門言語の他に関連言語を教えていらっしゃったのである。

二年次に必修の西洋古典語としてギリシャ語を選んだ私は、三年次に古浦先生のホメロス講読の授業を受けた。これは教師一人に生徒二人という、今では考えられないような贅沢な授業であった。毎回先生の研究室にお邪魔し、講読の後は紅茶をいただいた。授業は、最初の数回を先生によるホメロスのギリシャ語についての概説に充て、その後は二人の学生が交替でテキスト講読を担当するというものであった。テキストのすべての語の分析を行った後、日本語訳を付けそれを検討するというものであった（オデュッセイアの巻 1 を読んだ）。私は卒業論文でホメロスのテキストを対象に二重対格の問題を扱ったが、この古浦先生の授業がなければ、そのようなテーマは選ばなかっただろう。

4 年次は古浦先生の授業を最もたくさん履修した年である。4 年次の時間割を見ると、水曜日 4 限がイタリア語（初級）、金曜日 3 限がラテ

ン語のガリア戦記の講読、4限がドイツ語の演習（テキストは B. E. Vidos, *Handbuch der romanischen Sprachwissenschaft*, 1975）となっている。この年は卒論もある上に、これらの授業に加え、ロシア語中級（切明先生）やシュメール語初級（吉川先生）も受講しており、大変ではあったが充実感にあふれた年であった。

大学院に進学してからはさらに、先生のご専門であるダンテの神曲の授業を受けた。この授業を受けるために、700 ページ以上もあるダンテの神曲のイタリア語辞典（Giorgio Siebzebner-Vivanti, *Dizionario della Divina Commedia*. 1965 年の版）を先生からお借りし、まるまるコピーした（著作権の甘い時代）。伊伊辞典なので、予習をするのに大変苦労した記憶がある。

古浦先生と吉川先生のイメージの違いについて上で書いたが、両先生の研究についての好みの違いも感じたことがある。卒業論文でホメロスを対象にしようとしていたこともあり、私はまず古浦先生に相談した。そのときのことを日記には次のように記している。

「昼休みに古浦先生と、卒論のことについて相談した。僕が ἀφαιρέομαι の格支配についてやってみたいというと、先生は『それは卒論にしては問題が小さすぎるのではないか』と言われた（専門的すぎるのではという意味だろう）。修士論文なら良いが、卒論ではもっと大きなテーマを選ぶべきだ（問題をもっと広く扱うべきだ）、とアドバイスされた。なるほどと思い、結局次のようなテーマにすることにした。」

そこで、卒論のテーマはホメロスのテキストを対象に、二重対格を取ると言われている動詞が、実際にはどのような格と共に現れているかを調べることにした。その後、卒論題目発表会に臨んだわけだが、発表会の日の日記を見ると、吉川先生と古浦先生の研究に対する好みの違いが見られて面白い。古浦先生は面白いテーマだと仰ったが、吉川先生は「二重対格を特別視すると与格や属格が現れるのをおかしく感じるが、言語としてはそんなにおかしいことではない」というご意見であった。古浦先生はまず実際の使用状況を把握しようという文献学的な手法を好み、吉川先生は言語要素やその形態のもつ基本的な統語的機能を解明するという言語学的手法を好むということなのだろうか。すでに文法がある程度分かっている言語（イタリア語）と文法があまり解明されていない言語（シュメール語）というご専門の言語の違いが影響し

ているのかも知れないと今は思う。その日の日記は、
「古浦先生は発表会の後、『別のことも色々考えながら、今のテーマを進めて行きなさい』と仰った。古浦先生の言われたとおりにやっていこうと思う。」
と締めくくっている。
　大学院ではシュメール語を専門とした私だが、研究手法に関しては吉川先生の影響だけでなく、古浦先生の影響も大きく受けていると思う。今振り返ると先生の学恩の大きさに驚くばかりである。
　先生、長い間本当にありがとうございました。